Opinion

エアロビクス・ブームから十年がたった

信藤 直樹

エアロビクスダンスが日本で本格的に紹介されて十年。エアロビクスの広がりは、〝女性の美しさ〟のあり方に、大きな変化をもたらしました。

私がはじめてエアロビクス・スタジオを見たのは、今から十年ほど前のことになる。

当時、明治製菓が『月刊F・iT』というフィットネス雑誌を発行することになり、下っ端編集者の私もエアロビクスがどんなものかを知っておく必要に迫られたのだ。

新しい時代のエネルギー

十年前、原宿のセントラルアパートはまだ流行の中心地であり、その中にスタジオNAFAという最先端のエアロビクス・スタジオがあった。（現在はその百メートル先に移転）

薄暗い通りを抜けていくと、激しい音楽が耳に響き、異様な熱気に包まれた一角が出現した。

レオタードを着た若い女性の「群れ」が、鏡に囲まれたフロアで人目をはばからずにダイナミックに動き回っている。もちろんテレビや雑誌ではすでに見たことがあったが、私はその迫力に完全に圧倒された。

セクシャルな刺激がなかったと言えばウソになるが、それ以上に、ある種の時代のエネルギーを感じたのだ。

同じ年、女性ボディビルダーにしてパフォーマーでもあるリサ・ライオンが来日した。

「新しい時代の女性美」といった感じのうたい文句で、彼女のパフォーマンスは各種のマスコミで衝撃的に報じられた。と言えば聞こえはいいが、要するにキワモノ的な扱いをされていたのである。

私自身も取材で彼女のパフォーマンスを目の当たりにしたが、何だかとても不安な気持ちにかられたのを覚えている。

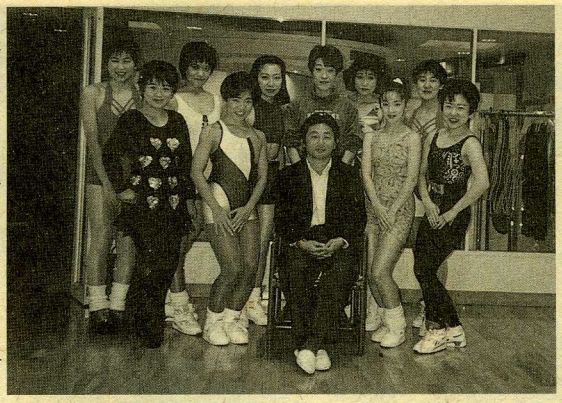
自分の考えていた女性という概念から逸脱した「女性」が現れた。男らしさの象徴であるはずの筋肉美が、女性によっていとも簡単に形成されてしまった。ある意味で、自分の確固とした「性」がおびやかされる不安感を、そのとき男性たちは感じていたのではないか。

〝カッコイイ〟女性とは

それから十年がたった。

私は協力者を得てフィットネス雑誌を新たにつくり編集長となったが、やっていることは同じである。相変わらずフィットネスの企画を立て、取材や営業を毎月くりかえしている。

いつしかレオタードにも慣れたし、筋肉が発達した女性も見慣れた。ナヨナヨとシナをつくる女性はあまり好きではない。背筋をピンと伸ばして、大股で堂々と歩く女性が好きである。そういうほうがカッコイイと思う。



▶講演後のスタジオでインストラクターと共に（筆者中央）

それはもちろん、私がフィットネス雑誌の編集長という「特殊」な仕事に就いているせいもあるだろう。

しかし私だけではなく、世の中全体が、

「女性がレオタードで激しく汗をかくこと」

「女性が筋肉を鍛えること」

「女性が自分の体を誇らしげに見せること」

などに対して一定の許容度を持ちはじめたのではないかと思う。少なくとも、十年前の不安感はもうない。

これからの女性像・男性像

エアロビクスが果たした功績として、女性のダイナミックな生き方を促進したことを、もっと強調してもいいのではないか。流行という形ではじまったエアロビクスが、それまでタブー視されてきた女性の「しぐさ」を解放し、女性の美しさの基準を拡大させたことは確かだと思う。

この十年で女性たちは、凛々しくなった。今度は男のほうが、

「実は俺、あんまり強くないんだよ」

と正直に認める番だという気がする。

〈へのぶとうなおき〉月刊フィットネスジャーナル編集長